

ハチクマ 英:Oriental Honey-buzzard 学:Pernis ptilorhynchus

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

全長: ♂527mm~615mm(142) ♀551mm~645mm(71)
 自然翼長: ♂393mm~447mm(142) ♀411mm~480mm(70)
 尾長: ♂225mm~274mm(137) ♀242mm~283mm(69)
 嘴峰長: ♂32.1mm~40.6mm(129) ♀33.9mm~41.2mm(62)
 体重: ♂793g~1305g(211) ♀853g~1582g(110)
 ※計測は信州ワシタカ類渡り調査研究グループによる。()内は計測個体数。嘴峰長はろう膜を含む。

羽色:

体下面の羽色や斑紋は変異が大きく、地色はほぼ純白から褐色、黒褐色まで連続的にさまざまな濃度のものがある。風切羽と尾羽の暗色帯は幅広く顕著なもの、細く淡いものの2種類が混在する。これはハチクマに特有の模様で、同定時の重要な手がかりとなる。頭部の羽毛は密で細かいが、スズメバチの毒針による攻撃を完全に防ぐほどの強度はない。虹彩色はオス成鳥では赤褐色から暗褐色、メス成鳥は黄色、幼鳥は暗灰褐色。オス成鳥では加齢によって虹彩の赤味がしだいに弱まった事例が数個体で確認されている。ろう膜は成鳥では暗灰色、幼鳥では黄色。成鳥でも若齢個体のろう膜にはしばしば黄色部が残る。



写真1. 上: オス成鳥。下: メス成鳥とヒナ。

鳴き声:

飛翔中などに「ピーイー」と鳴く。繁殖林内では「ピューピュー」と聞こえる声を出す。ヒナの声は他のタカに比べて小さい。

2. 分布と生息環境

分布と生息数:

東アジアに広く分布。中緯度地域で繁殖し赤道付近まで移動して越冬する。

日本には夏鳥として飛来し、北海道、本州、四国、九州の平地から山地の森林で繁殖する。台湾では近年、留鳥として周年生息するようになった。八重山地方では真冬にハチクマが記録された例があるが、これは台湾から飛来した可能性がある。

生息環境:

基本的に森林内で生活する。人里近くの人工林から、奥山の自然林までさまざまなタイプの森林を利用し、林地に隣接する田畑、牧草地、養蜂場などで採食することもある。

3. 生活史

繁殖システム:

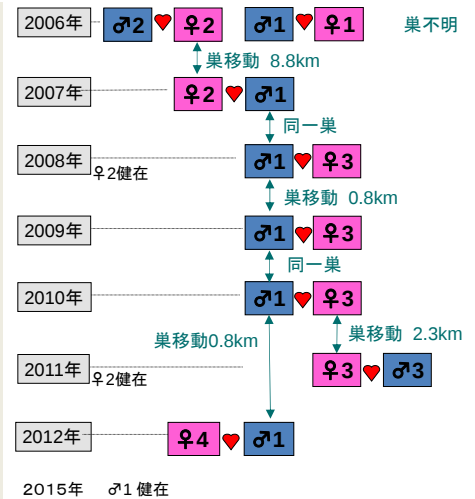
一夫一妻で繁殖すると考えられるが、つがい相手は必ずしも毎年同じではなく、

長野県では7年間に3個体のメスとつがい関係を形成したオスが記録されている(図2)。また巣の位置を17km移動させた例も報告されている(佐伯・堀田 2014)。



図1. ハチクマカレンダー(本州中部)。下は繁殖期。

図2. つがい関係の変遷の例。作図: 信州ワシタカ類渡り調査研究グループ



巣, 卵:

アカマツ、カラマツ、スギ、モミなどの針葉樹や、コナラ、クリ、カシ類などの広葉樹に巣をつくる。卵は通常2個だが、ときに1個、まれに3個のケースもある。卵は球に近い卵形で長径40~57mm、短径33~45mm。白ないしクリーム色の地色に赤褐色や暗褐色の斑が全面に散らばる。

抱卵・育雛期間, 巣立ち:

産卵は5月下旬~6月下旬。抱卵期間は30日~35日。雌雄が抱卵し、それぞれ丸1日抱卵を続けた後に交代することが多い。ヒナへの給餌も雌雄でおこなう。育雛初期はメスが巣に滞在する時間が長い傾向がある。育雛後期になると、メスに比べオスがより高い頻度でヒナへの給餌をおこなう傾向がある。給餌内容の調査結果には差異が大きい。基本的にはスズメバチ類やアシナガバチ類の幼虫が主体で、カエル類、小鳥のヒナ、ヘビ類、トカゲ類、キリギリス類などの昆虫がそれに加わる。ハチクマの巣では“カイニズム(兄弟いじめ)”は見られず、兄弟が並んで同じ蜂の巣をつつく光景が普通にみられる。またオス親とメス親との力関係がほぼ直角である点も他のタカ類との違いといえよう。ヒナのフンは巣の外に向かって噴射されることはなく、巣の中や縁部にぼとりと落とされる。一部は親がついばんで撤去するが、多くは放置される。親は育雛期間を通して青葉のついた木の枝を大量に巣に持ち込むが、これはフンによる汚染を防ぐためとも考えられる。ヒナは孵化後35~45日で巣立つが、これは同サイズの他のタカ類にくらべやや早い。巣立ち後しばらくは親とともに過ごすようだが、その

期間や暮らしぶりについては不明である。長野県内で調査された60巣からは最大66羽のヒナが巣立ったと推測されており、このときの巣あたりの巣立ちヒナ数は1.1。

ディスプレイフライト:

ハチクマは独特のディスプレイフライトをおこなう。高空を飛びながら深い波状飛行を何度か続け、それぞれの最高部で開いた翼を上方で数回打ち合わせる。オスのみでなく、頻度は低いもののメスもおこなう。ディスプレイフライトは繁殖期を通して見られるが、初夏の飛来当初と8月上旬から9月上旬にかけての時期に見る機会が多い。また巣の近くのみでなく、巣から10km以上離れた場所でも観察されている。このディスプレイフライトがどのようなメッセージを持つのか大変興味深い、今のところ明確な答えは得られていない。



写真2. ディスプレイフライト。

渡り:

長崎県の福江島などで秋に大群が観察されることから本種の渡りはかねてより注目されていた。近年、国内で繁殖する50個体以上が衛星追跡され、多くの情報が得られている(Higuchi 2012)。使用された送信機は太陽電池方式で、順調に作動すれば3年以上ハチクマの位置情報を記録できる。調査の結果、追跡されたすべての個体が片道1万kmにおよぶ長距離を移動したが、その経路は直線的ではなく、何度も方向転換しながら大きく迂回することがわかった。例えばフィリピンで越冬する個体は春になるとスマトラ島まで南下した後に進路を変え、マレー半島南端部から北上を開始する。中国内陸部を北進して朝鮮半島の付け根までくると今度は南へと進路を変え、朝鮮半島を縦断した末によりやく日本列島に到着する。また春の渡りの途上、それぞれの個体が東南アジア、あるいは中国南部のどこかの地域に1週間から1ヶ月ほど滞在することも明らかになった。

4. 食性と採食行動

本種の最大の特徴は、蜂の幼虫を好物とするその食性だ。毒針で武装するスズメバチから幼虫をどのようにして手に入れるのかは長年の謎であった。筆者の所属する信州ワシタカ類渡り調査研究グループでは、クロスズメバチ類の巣にセンサーカメラを設置し、ハチクマが蜂の巣を襲撃する様子を数多く撮影してきた。また近年、台湾とタイにおけるハチクマの狩りの様子がテレビやDVDで紹介された。これらの映像により、ハチクマはクロスズメバチなどの地中性の蜂の巣を攻撃する時と、樹上に巨大コロニーを作る大型スズメバチの巣を攻撃する時では異なる攻略法を駆使することがわかったが、ハチクマの狩りに関してはまだ謎が多い。ハチクマに襲撃された蜂は、しばしばまるで魔法にかけられたかのように攻撃性を失ってしまい、その巣を易々と奪われてしまうのだが、ハチクマの襲撃は常に成功するわけではなく、蜂の激しい反撃に退散するケースもある。またハチクマは蜂にまったく刺されないわけではない。養蜂場で捕獲されたハチクマの体にはミツバチの毒針が残っていることがあり、その針は特徴的な羽毛に覆われた頭部の皮膚からも見つかる。

成鳥のスズメバチ以外の食物については不明な部分が多いが、ヒナへの給餌内容と同様の昆虫類やカエル類を食べる可能性は高い。越冬地では樹上や断崖に作られたオオミツバチの巣を襲うことが知られている。また近縁のヨーロッパハチクマは液果(イチゴ類など)を食べるとされ、飼育されたハチクマが果物を好んで食べたとの報告もあるので、植物質も利用している可能性も考えられる。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● ハチクマの行動圏

繁殖期のハチクマの行動圏は広く、長野県内で電波発信機を用いて調査された3個体(♂2, ♀1)の活動点の最外郭を結んだ行動圏はそれぞれ203km², 193km², 165km²であった(久野・堀田 2013)。育雛中、ハチクマが巣から10km以上離れた場所まで蜂の巣を取りに出かけるのはごく日常的なことである。抱卵期の移動スケールはさらに大きく、一度飛び立った個体が1時間以上どこにも着地することなく飛び続けることも珍しくない。まっすぐに飛べば30km, 40kmの移動になる。上記の3個体の追跡調査でも、移動距離が大きすぎるために追跡しきれず、行き先を見失ってしまうこともしばしばであった。実際の行動圏は調査結果よりもさらに広がっただろうと考えられる。春秋合わせて2万kmもの渡りを毎年繰り返すハチクマのもつ距離感は、我々とはまったく異なるものなのだろう。

6. 引用・参考文献

- 朝日新聞出版. 2010. NHKダーウィンが来た! DVDブック. No.1. 朝日新聞出版, 東京.
- Higuchi, H. 2012. Bird migration and the conservation of the global environment. *Journal of Ornithology*, 153: 3-14.
- 樋口広芳. 2014. 日本の鳥の世界. 平凡社, 東京.
- 久野公啓・堀田昌伸. 2013. ハチクマの蜂食行動と行動圏. (樋口広芳, 編: 日本のタカ学) pp. 124-144. 東京大学出版会, 東京.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1985. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
- 佐伯元子・堀田昌伸. 2014. 日本で過ごすハチクマの暮らし4ヶ月. パーダー 28(9): 16-17.
- 台湾猛禽研究会. 2011. 九九蜂鷹(DVD). 行政院農業委員会林務局, 台北.

執筆者

久野公啓 信州ワシタカ類渡り調査研究グループ

ハチクマのあれこれを本気で調べはじめて早15年。その成果がNHKで紹介されたり、衛星追跡調査に参加(捕獲&機器装着担当)したりと、それなりの収穫はあったのだが、まだまだわからないことばかり。メインテーマである“蜂掘り”の謎も、その核心部分は遠くかすんで未だ見えてこない。あれこれ考えていると情けない気分になるので、気晴らしに、自宅や調査地で馴染みになったカラスや小鳥と戯れる。いつかはハチクマとも仲良くなれますように、と夢見ながら日々を暮らす。

